

講演「李光洙（イ・グァンス）の生涯と作品」

（要旨、日韓文化交流基金 NEWS58 号に掲載）

2010 年 12 月 3 日

波田野節子氏（新潟県立大学教授）

イ・グァンス
李光洙（1892 年～1950 年）は、小説家、民族独立運動家、二度目の日本留学と『無情』詩人、言論人、教育者など、非常に多面的な活動をした人物です。彼は「余の作家的態度」（1931 年）という文章で、「わたしが小説を書く究極の動機は.....わたしが行なうすべての行為の究極の動機と一致するのであって、それはすなわち朝鮮と朝鮮民族のための奉仕—義務の遂行>である。これのみであり、またこの他に何も無い」と語りました。

しかし、皮肉なことに、彼は親日行為によって、今に至るまで「民族の反逆者」とされている人物でもあります。最近も、韓国のインターネット新聞で、釜山にある彼の詩碑（写真 1）について、「親日派の詩碑など民族の恥である。直ちに撤去せよ」と書かれたことがありました。



写真

海雲台の李光洙の詩碑

最初の留学と文学の目覚め

李光洙は 1892 年に平安北道定州の貧しい家に生まれました。父母は 1902 年に朝鮮半島を襲ったコレラの流行で亡くなり、彼は 10 才で孤児になります。そして当時朝鮮の北部で盛んになっていた東学に身を寄せたことから、東学の留学生として、日本に留学することになります。

1906 年 4 月に大成中学校（東京・三崎町）に入学したものの、天道教（東学から改名）の内紛問題により数か月で学費が途切れ、退学を余儀なくされて一度帰国します。幸い天道教の留学生全員が特別に官費を支給されることになり、李光洙は翌年秋に明治学院普通部（中学校）に編入します。

明治学院での 1907 年秋から 1910 年 3 月末までの 2 年半、彼は勉強に打ち込む一方で、

多くの日本小説と翻訳された西洋文学作品を読んで文学に目覚め、自分でも作品を書き、また文学を通じた交友を深めます。同時期に日本に留学していた洪命憲（1890年～1968年。歴史小説『林巨正』作者。後に北朝鮮副首相）、このころ韓国で最初の総合雑誌『少年』を出していた崔南善（1890年～1957年。詩人、歴史学者）、そして李光洙の三人は、「韓末の三天才」と呼ばれて、終生にわたる縁を結びました。李光洙の処女作は、明治学院中学の学校誌『白金学報』に1909年12月に発表した「愛か」という日本語小説だと思われます。

二度目の日本留学と『無情』

明治学院中学を日韓併合直前の1910年3月に卒業した李光洙は、生まれ故郷の定州にもどって結婚し、民族主義者・李昇薫が設立した五山学校の教員として民族教育や農村改造運動に熱心に取り組みます。しかし、やがてこの生活に行きづまりを感じ、1913年の終わりに大陸放浪の旅に出て、1915年には早稲田大学に再度留学します。

彼がやってきた大正時代の東京は、非常に自由な空気に溢れていました。『無情』の最初の場面で、主人公の青年が大変緊張しているのは、男女が親しく接することのない朝鮮の環境を描いたものでした。ところが、東京では若い男女が自由に付き合うことができ、朝鮮に早婚した妻を置いてきた男子留学生と未婚の女子留学生の間にはしばしば問題が起きました。李光洙も女子留学生らと交際し、韓国最初の女医になる許英肅と愛し合うようになります。

この第二次留学時代こそ、李光洙の輝かしい青春時代といえるでしょう。予科を経て1916年9月に早稲田大学哲学科に入学したころから、朝鮮で唯一の朝鮮語新聞である『毎日申報』に論説を書くようになり、1917年には同紙に『無情』の連載を始めて、人気を博します（写真2）。日本では第1次大戦の影響でインフレが起きており、学費不足の彼は『毎日申報』からの原稿料で何とか大学生活をやっていけるほどでした。栄養不足もあって、彼はこのころ日本に蔓延した肺結核に罹りますが、許英肅のおかげで一命を取り留めます。



写真2 『無情』連載第1回

『無情』にはヨンチェとソニョンという二人の女性が登場します。20年前の論文で私は、ヨンチェには故郷に残してきた妻の姿が投影されていると書きました。状況からすれば、ソニョンの方には許英肅が投影されているのではないかと思っていましたが、最近李光洙の第二次留学時代を詳しく調査した結果、『無情』を書いたのはまさに許英肅と知り合ったところであり、作中に見られる主人公とソニョンとの自意識の葛藤には、やはり李光洙と許英肅との葛藤が投影されているとわかりました。また、『無情』に現れる虚無的な部分は、そのころ彼が肺結核に罹っていたことを想像させます。

1919年2月8日、東京で留学生たちが独立を宣言し、その1か月後には本国で3・1運動が起きます。李光洙は自分が起草した宣言文の英訳をもって東京から上海に亡命し、大韓民国臨時政府の樹立に参加します。写真3を見ると、若いのに真ん中に誇らしげに写り、オーラが感じられます。後ろに立っているのが独立運動家の安昌浩(1878年～1938年)で、彼との出会いが、李光洙のこの後の道程を決めることになりました。



写真3 上海臨時政府集合写真。前列左から3番目が李光洙。後列左から4番目が安昌浩

修養同盟会時代と弾圧、転向

安昌浩は平安北道の出身で、米国で「興士団」を創り、独立準備のための民族自強の思想＝興士団思想を唱えました。それに共鳴した李光洙は、上海を離れて朝鮮にもどり、1922年に興士団思想の団体である修養同盟会(後の同友会)を立ち上げます。この時期の彼にとっては修養同盟会が生活の柱であり、ある場所で彼は「小説は余技だ」と言っています。しかし、余技というにはあまりにも多くの小説を書いています。やがて彼は、子どもを亡くしたり、結核の再発に苦しんだりして、次第に仏教への傾倒を深めていきます。

1932年(満州事変の翌年)に、安昌浩が上海で日本の警察に逮捕されて送還され、3年間刑務所に入ります。出獄して2年後の1937年に同友会事件が起きると、また逮捕され、病気保釈されたものの、翌年3月に亡くなります。この事件で李光洙自身も逮捕されて、やはり病気で保釈されています。同友会は朝鮮総督も了解のうえで発足した合法的な団体でしたが、時代が変わってしまったのです。1937年には同友会を含め、さまざまな団体が朝鮮総督府による弾圧の対象になっています。この事件で同友会は多くの逮捕者を出し、司令塔である安昌浩を失うなど大きな打撃を受けました。李光洙は責任を担わざるを得な

い立場に立たされます。

1938年11月、李光洙は同友会の会議を開き、朝鮮総督府に転向をアピールします。1941年の無罪判決まで裁判に明け暮れる日々がつづきますが、彼は病床でも口述筆記で執筆するなど、「余技」にしては激しい創作活動を続けています。

1938年から解放までは、逆に、ある意味でわかりやすい時期だと言えるかもしれません。彼は日本に協力し、日本語で小説も書きます。しかし短編小説は書けても、長編小説はつねに未完に終わっています。また、激烈に天皇を礼賛する論説を多く残していますが、決まり文句ばかりで、よく見れば内容的には民族改造論を書いていたころの延長であって、大きく変わってはいません。

第三回大東亜文学者会議（1944年、南京）に李光洙が朝鮮代表として出席したときのことを、一晚同じ部屋で寝た金八峰（文学評論家、小説家）が書き残しています。李光洙は<どうせやるなら、徹底的に日本人になって日本人に勝ち、むこうが嫌がって、頼むから出て行ってくれと言うまでやるんだ>という意味のことを言ったので、金八峰は、そんな夢みたいなこと、何言っているんだ、と寝てしまった、と書いています。自分の言葉に行動の方を合わせるところまで行っていたとさえ思えます。彼の対日協力は、痛ましいほどです。

解放と死去、李光洙研究の現在

思陵で農業生活をしながら隠棲していた李光洙は、そこで解放を迎えます。1949年に反民族行為処罰法によって逮捕されますが、保釈・不起訴になっています。1950年6月に朝鮮戦争が勃発したとき、李光洙は病気でした。7月には人民軍によって逮捕・収監され、そのまま平壤に送られたようです。やがて連合軍の上陸による戦線の北上で、平壤からさらに北に移動している時、寒さにやられ、江界付近で10月に亡くなったと言われています（写真4）。



写真4 北朝鮮の李光洙の墓

最近、李光洙研究は再び熱を帯びているようです。私が李光洙研究を始めた 1980 年代の終わり頃から論文を書いた 1990 年代初めにかけての韓国では、李光洙研究をしていると言にくい雰囲気があり、私の日本語の論文がいつか韓国語に訳されて韓国の人が読むなんて考えられませんでした。ところが、1990 年代後半ごろから雰囲気が変わり、最近は学界の重鎮が重厚な研究書を刊行するとか、李光洙研究のための学会が設立されるなど、研究が活発に行われるようになりました。年配の李光洙研究者からは、自分が体感として知っている李光洙の時代のことを書き残しておきたいという熱意が感じられます。一人の人間をどう見るかということは、社会のあり方を表しているものですから、韓国の社会の変化とともに、李光洙の研究もこれから変わっていくのではないかと考えています。

(了)